江戸っ子教授・逝く

木村一朗

今からもう二〇年近く前になる。昭和四五年の四月、神奈川大学経済学部の一員として教授会に初めて出席した時のことである。当時は、大泉行雄先生、大野信三先生、古沢源刀先生、小山伝三先生など今はもう懐しい方々がおられ、新参者の私は、ともかくも神妙に宮川武雄学部長の議事進行に耳を傾けていた。

……と、少し離れたところから変なノイズが聞こえてくる。それが段々大きくなってきた。人間の喉頸、口蓋垂（いわゆるノドチンコ）を震わせて出てくるあのノイズ。鼾だ！　でも、こんなところで……と見回すと、居た、居た。渋い背広に蝶ネクタイ、小粋な格好で背筋をピンと伸ばしたオッサンが鼾をかいている。ナンタルコトダ！　こいつは何者だ！　……これが、その後私にとっては人生の師として親しくお付合いいただくことになった小林肇先生との出会いであった。正確には、その後、ある時は悪夢のように悩まされ、ある時は心地良いＢＧＭのように皆を楽しませてくれた彼の大鼾との出会いであった。

翌年、この鼾のせいであったかどうか、小林先生は学部長に選ばれた。当時は、学園紛争が全国に蔓延し、神大は中でもその頂点をなすかのようにゲバ学生の猛威が荒れ狂っていた。私もひよんないきがかりから教学執行部の一員

となり、ここから小林先生とのお付合いが始まったのである。以後一〇年ほど紛争の渦中で苦労を共にすることになるのだが、ほとんど実りの無い、不毛といってもよい年月の中で、一緒に苦労した「戦友たち」とともに、小林先生を知り、狭小な「世間知らずのアカデミズム」の呪縛から解き放ってくれる様々な教えを受けたことは譬えようもない倖せであった。

このような追悼文めいたものを書くにあたっては、まず、その人の学問的業績を称揚し、あわせてその人となりを紹介するというのが常道であろうが、もともと浅学で、専門分野も異なる私には、小林先生の学問を論ずる資格はない。しかし、長い付合いの中で知りえたのは、彼が、既成の理論や概念に囚われず、自由な、奔放ともいえる発想を求めながらも、口先だけの空疎な議論ごっこに陥いることを厳に戒め、企業社会の現実や実践活動との繋がりを常に厳しく求めておられたということであった。そしてそのバック・グラウンドには、古今東西、文武百般に亘る彼の驚くほど該博な知識があった。これは、彼のこれまでの波瀾に富む遍歴、経験の中で培われてきたものと思われる。

小林先生は、大正一三年、神田東福田町（今の千代田区岩本町、日本橋三越デパートの前あたり）で商家の長男として生まれた。「江戸っ子だってねェ？」、「神田の生まれヨ」、「寿司食いねェ」、の神田の生まれ、チャキチャキの江戸っ子である。生家は商家といっても祖父御の代までは清元の師匠をしておられた。御当人も子供の頃お祖母さんの手解きで始めた清元を長い間続けておられたという。そういえば、酒席で興が乗った時の先生の軽妙な話術には一種浄瑠璃を思わせるような趣きがあった。

私が聞きかじった小林先生の多彩な人生遍歴については後で述べるとして、驚くべきは、その一方で、生涯を通してスポーツに、それも複数のスポーツに打ち込んでおられたことである。今も日本橋三越前にある十思小学校時代から始めた水泳は、府立一商でも続け、度々選手として活躍されたという。水泳についてはごく最近まで一七号館の室

内プールで泳いでおられる小林先生を見かけた人は多いと思う。府立一商では同時に柔道もやられた。東京商科大学（現一橋大学）では、当時寮に住んでいた友人の（ミッチーこと）渡辺美智雄氏らから柔道部へ勧誘を受けたが、ボート部へ入り、黒帯のかわりにオールを握って活躍されたという。社会に出て、まだブームが始まるはるか前に始められたゴルフは一流の域に達し、神奈川大学でもゴルフの先生として有名で、私をはじめ、彼の薫陶を受けたヘボ・ゴルファーは数多い。

東京商科大学在学中は、学徒動員で一年間兵役（甲府連隊）に就くという激動の時代であったが、大学で学んだ商学、経営学とともに、藤井義夫教授のゼミナールでのギリシャ哲学はその後の知的生活のベースとなったと時折述懐しておられた。しかし何といっても我々の目を惹き、彼の人生を彩っているのは「演劇」とのかかわりだろう。府立一商時代にすでに演劇に魅せられ、文化祭での寸劇をはじめいくつかのシナリオを書き、おおいに受けていたという。本格的な演劇活動を始めたのは大学時代であった。今も俳優として活躍中の久米明氏らと「演劇部」を創設し、初代のリーダーとして、脚本、演出、役者と八面六臂の活躍だったという。またこの時期、山本安英の後援会的同好会「ぶどうの会」を組織し、「夕鶴」の初回公演以来の裏方もつとめられた。こうみてくると、これ以後、貝谷八百子バレー団に所属して舞台に立っておられたとか、清元節とは様変わりの洋楽（声楽）を始め、藤原歌劇団公演の舞台に立ってバックコーラスや鎧武者を勤めておられたと聞いても我々はあまり驚かない。なるほど、彼のあの颯爽とした軽やかな身のこなし、酒席でごくたまに披露されたあの素晴らしい歌声はバレーやオペラのせいだったのかと納得してしまう。ついでながら、バレーやオペラを後になって止めた理由を、御当人は、「女性の重いシリを持ち上げるのが嫌になった」、「鎧やなんか衣裳が重くて敵わなかった」と笑っておられた。いずれも小林先生らしい。

大学を出て、興国人絹パルプに入られてからは終始労務畑を歩かれた。やがてその道のスペシャリストとして、企

業の幹部教育、社員教育等で全国を忙しく駆け回られることになる。各地の電力会社、自動車会社、ビール会社などの一流企業が対象であり、当時先生の講演を聞いたり、研修を受けたりした人々の多くが、現在夫々の会社の管理職となっておられる。先生の企業人との交遊関係の広さの基礎はこの時期に築かれたといってよかろう。

昭和三三年には、自立して、友人とともに日本マネジメントスクールを創設し、教育本部長を勤め、経営管理のスペシャリストとして更に一歩前進される。彼の主著である『組織と人間』を世に問い、また、東京12チャンネルで「職場」というドラマ仕立ての三〇分番組を毎週レギュラーで持ち、解説と司会を担当するなど油の乗った活躍をみせ、雑誌で「これからの日本を背負う経営学者」などと紹介されたのもこの時期である。また、興人以来の対外活動の中で、各界の人々との交流も広がり、それには（彼自身の趣味もあって）音楽家、画家などの芸術家も含まれていた（その中に、当時新進女流画家として売り出し中の、後の小林夫人もおられた）。この頃、彼は、趣味が嵩じてというと叱られるかもしれないが、私財（日本橋の家）を抛って、「モメント・ミュージカル」という芸術関係の会社を設立している。ラジオ関東の深夜の時間を買い切って、スポンサーとして音楽とおしゃべりの番組を提供し、自らDJを勤めていたというのはこの時である。これにはエピソードがある。時折、横浜で十分に聞こし召し、御機嫌でスタジオに入り、ぶっつけ本番でマイクに向かうことがあった。段々酔いが回って、あのヒとシが逆転する江戸っ子なまりで、呂律が怪しくなりだしたものだから、「酔っ払いがしゃべっているようで、何を言っているのかさっぱりわからない」という苦情の電話が局に寄せられたという。これにはさらにエピソードがある。彼がマイクに向かってDJをやっている時には、マイクの向こう側に、番組には登場しないが、いつも若い美人が坐わって、頬杖をつきながら彼を見つめていたという。私の調査（？）によれば、この女性は後の小林夫人に間違いない。昭和三〇年代の話だ。

神奈川大学に来られてからは、大学紛争に巻き込まれたこともあって、先生は、対外関係を少しずつ縮小し、次第

に教育・研究一筋の生活に入っておられたように思われる。学生の指導も、公私に亘って本当に熱心にやっておられた。我々は、彼の洒脱な人柄、豊かな経験にもとづく奥深い知識、軽妙な話術に魅せられ、学校で、酒席で、彼といるといつも時の経つのを忘れた。良きにつけ悪しきにつけ、とかく徒党やグループを作りがちなわれわれの世界で、彼は常に不遍不党を貫き、言葉は悪いが、喧嘩は一人でやるものだというような気概を持っておられたようで、誰とでもフランクに付合っておられた。しかも彼は、座談の名手でありながら無類の「聞き上手」であった。大学というところには、自分のこと、自分が言いたいことには熱心ないわゆる「話し上手」は掃いて捨てるほどいるが、本当の意味での「聞き上手」は数少ない。そういうところが彼が若い人達にも敬愛され、多くの人々を惹きつけた所以だろう。

小林先生を評すれば、「江戸っ子」という一語に尽きる。権威に屈しない奔放さ、旺盛な探究心、新しいもの好き、名利、金銭に恬淡とした気っ風の良さはまさにその通りであった。家やなんかに金はかけなかったが、美味しい食事や美味い酒には目がなかった。正月には入れ代わり立ち代わり訪ねてくる何十人という教え子達に大盤振舞をし、年に何組という割合で教え子達の仲人をして全国を駆け回った。亡くなられる直前まで仲人をする教え子の披露宴の打合わせをしておられたぐらいだ。人からものを頼まれるとイヤとは言えない性格で、返ってくるあてがないのに借金までして他人に金を融通してあげる面倒見の良さ（同時に少々の見栄っ張り）も江戸っ子らしい。義をみてせざるは式の正義漢で、亡くなられる二、三日前まで身体障害者の社会復帰施設の理事として、いろいろ難しい問題に対処されていた。また、非常に喧嘩っ早い人だったが、いわゆる他人の悪口を言われるのを聞いたことがなかった。

最後に一つだけ付け加えれば、彼はいつの場合も引け際の見事な人だったということだ。演劇をやっておられたせいか、もともと備わっていたのか、その鮮かさに私はいつも感嘆した。会議や座談の切上げ方は言うに及ばず、酒席

での引け際も見事なものだった。酒が飲めず、あるいは酒を飲まぬまま早々に退散する、というのではない。おおいに飲み、語り、笑い、皆を楽しませた後、ある絶妙なタイミングをとらえてさっと退場されるのである。未練たらしくいつまでも飲んでいる我々呑兵衛はそれに気付かないこともしばしばであった。

小林先生は、亡くなられるちょっと前、ゼミの論文集の序文で、ゼミ卒業生が二五〇名を超えたことを喜ばれ、次のように書いておられる。

「二五〇人の青春の一時期にかかわりをもつことができたのはほんとうに幸せであった。わたしのまわりには、将来への意欲、不安、友情、愛その他青春の思いを豊かに抱いている若者たちがいつもいてくれた」。

私はこれが過去形で終っているのが今になっては気になって仕方がない。御本人も予期しない突然の心臓発作であるから、自らの死を予感されていたとは思えない。神か何かが本人も気付かないかたちで、別れの予感を与えていたとしか思えない。実は、私をはじめ小林ゴルフ教室の面々は、この一、二年、あれほど好きだったゴルフにも、体調が思わしくないと、あまり出掛けられないようになっていたし、かつてあれほど猛威を振るったあの大鼾が最近すっかり温和しくなってしまったのを寂しく思い、また先生のお体を心配していた。しかし、私達はともかく、傍におられた御家族に対しても、別れの言葉はおろか、その予感すらまったく与えないまま、あっという間に逝かれてしまうとは……。

不謹慎の謗りを受けるかもしれないが、悲しみを別にして言わせてもらえば、この引け際は、まさに小林先生に相応しいものであった。彼は、（もちろん、結果的にだが）自分流のやり方で自分の人生の幕を引き、我々の前から去って行かれた。あの小粋な立居振舞、豪快な笑い、少々薄くなり光りはじめたおつむ、懐しい笑顔、すべては永久に消え去った。いま我々は、恰も名優が退場した後の舞台にいるような、馥郁たる余韻につつまれている。